

金剛寶戒寺便り

二月一日発行 第十一号

檀信徒の皆さまこんにちは。一年で一番寒い時期ですが庭の梅の蕾も目立つようになってきました。立春も過ぎると陽が長くなるのを感じます。春はそこまで来ています。

三月二十一日は何の日だか御存知ですか？正御影供（しようみえく）と呼ばれ、お大師様、弘法大師空海さまが高野山の奥の院に御入定された日になります。高野山では毎年、新暦と旧暦の二回にわたり全山住職をあげてお大師様に報恩を捧げる事からも、最も大事にされている法会であることが分かります。

この日にはお大師さまの身代わりとして一年間にわたり高野山の重要な法会の御導師をお勤めになる「法印御房」が御出仕なされ、信者の方も大勢参列し非常に華やかな法会となります。御影供はお大師さまが御入定されて七十六年目の延喜十年（九一〇年）三月二十一日、京都の東寺（とうじ）にあります「灌頂院（かんぢょういん）」というお堂にて、当時の長者（一番偉い方）観賢僧正（かんげんそうじょう）がお始めになられたといわれ、高野山ではそれより遅れて久安四年（一一四八年）三月二十一日に金剛・胎藏の両秘法を修法して報恩を捧げたことが伝えられています。現在では御衣（ぎよい）のお寺として有名な寶龜院（ほうきいん）様より、金剛峯寺へ従者と共に唐櫃にて「御衣」を奉持します。

金剛峯寺では本山の重役を初め、執行代（しぎょうだい）と呼ばれる方がおまちうけします。金剛峯寺に運ばれた「御衣」は一端持仏間（じぶつおのてら）の先住様のご位牌や仏様をおまつりしている部屋（ぶつむら）の前の浄薦の上に蓋を開けて置かれ、御法楽（仏様にお経を読んで捧げる）をします。続いて先の執行代様が目録と中身を照らし合わせて確認し、すぐに寶龜院様と先の従者と共に奥之院へ向かいまします。奥之院に着けば燈籠堂正面に唐櫃を安置し、ただちに執行代様がご供養のために一座の修法をされます。

さらに九時から引き続いて本番の「正御影供」を執行し、懇ろに供養された唐櫃の中の「御衣」は再び従者と共に今度は御影堂（みえどう）へ向かいます。そうして御影堂に着いた「御衣」は御影堂の内々陣（お堂の一番奥のところ）に安置され、一年間にわたり供養が続けられます。この御衣は来年の法印御房がおめしになります。（高野山HPより抜粋）
今年が高野山開創一二〇〇年にも当たりますので例年以上の参拝者があると思えますが、都合のつく方は是非お参りしてみてください。

因みに二月十五日はお釈迦様が入滅された日にあたり涅槃会（ねはんえ）と呼ばれる法会が夜通しで行われます。「涅槃」とは悟りの境界の事で高野山では常楽会（じょうらくえ）とも呼ばれますが、釈尊の徳を讃える法要です。何も不自由のない釈迦族の王子として生

まれたお釈迦様は二十九歳で出家され三十五歳の時に菩提樹の木の所で悟りを開かれて、それから入滅される八十歳までの間、悩み苦しむ民衆の為に説法を説かれたと言われています。

十五年ほど前までは当山にも巡廻布教の先生に来て頂き説法をお願いしておりました。かねてより希望が多かったのですが、本年より再興する運びとなりましたので御案内致します。

日	ち	平成二十七年三月九日（月曜日）
時	間	午後二時三十分より約一時間
場	所	金剛宝戒寺 本堂
講	師	長尾宗学師

私は今回法話をして下さる、長尾先生とは直接的には面識はないのですが、高野山での修業中に布教を教えて下さっていたのは、長尾先生のお父様でしたので、時間の流れとご縁を感じます。長尾先生は昭和四十四年のお生まれで、まだお若いですが高松市の弘憲寺の第十七世住職として、また高野山本山布教師として活躍されています。自坊では悩み相談を受けながらユニークな行事もされており、地元西日本放送ラジオの「波乗りラジオ」という番組内では月に一度、法話のコーナーを担当しているそうです。今回は御法話のみですので四時には解散となります。椅子席も用意してありますのでお参り下さい。合掌